続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第10回

○シケレペ川

「シケレペ川」は、庶路ダム湖の東側から北へ向かっている川です。「シケレペ（キハダの実）・ペッ（川）」という意味で、白糠地名研究会は「キハダの木が生えている川」と訳しています。

キハダの木は、普通「シケレペニ（シケレペのなる木）」と言いますが、地名研究会はその場所のようすとしてシケレペを「キハダの木」と解釈したようです。

■食べ過ぎ、打ち身に効能あり

キハダは、ミカン科に属する落葉樹で、北海道や東北地方では「シコロ」と呼ばれます。黄色い内皮は生薬「オウバク」として食中毒や食べ過ぎ、打ち身やねんざなどの治療に用いられます。

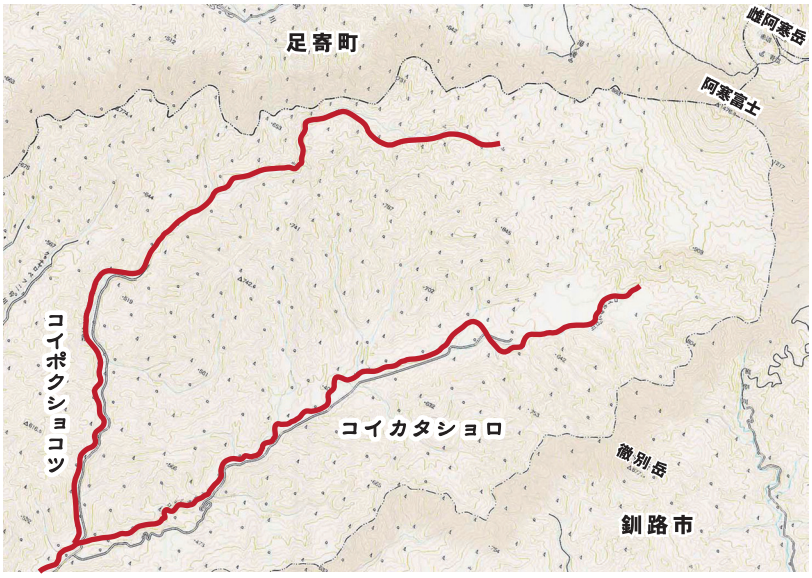
故根本與三郎氏は「シコロの実には甘いのと苦いのがある。甘いのをとってきて干して保存しておく。お茶にしても飲めるし、カゼや胃の具合が悪いのに効く。シコロの木の皮は、打ち身やねんざの患部に貼るとなおる。カゼをひいて唇が渇くとき、内皮のぬるぬるした黄色い部分を布につけて貼るとなおる。」と述べています。

【参考・引用／『アイヌ民族の有用植物　薬用・食用編』・『シラリカコタン』】

○コイカタショロ川・コイポクショコツ川

庶路ダム湖を出た庶路川は、クッチャロベツ川と分岐して北上し二つの川に分かれます。

右方向の「コイカタショロ川」は「コィカ（東方）・タ（ある）・ショロ（庶路）川」で、東方の庶路川であることを示し、左の「コイポクショコツ川」は「コィポク（西方）・ソ（滝）・コッ（くぼみ）」から「西の滝つぼのある川（庶路川）」と訳しますが、永田方正は『北海道蝦夷語地名解』で「コッ」を「谷」と解釈し、二つの庶路川を「東ノ瀧川」「西ノ瀧谷」と訳しています。



また、探検家の松浦武四郎は「コエホクシヨロ、此方西に入メアカン岳の下に到る、コイカタシヨロ、雌岳（雌阿寒岳）南の方に入る」と、どちらも雌阿寒岳に通じていることを『東蝦夷日誌』に記しています。

ちなみに、松浦武四郎は「北海道」の名づけ親でもあり、2018年（平成30年）は、1869年（明治2年）に「北海道」と命名されてから150年目です。